

# 目次

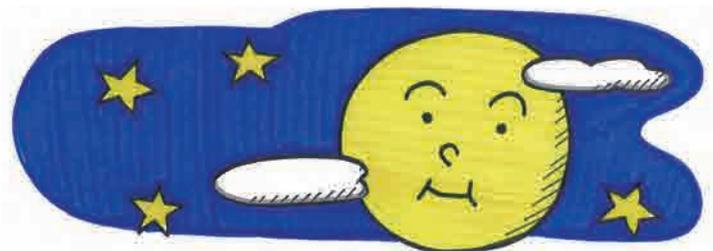
- 1 はじめのうた
- 2 季節のカード (ことば編)
- 3 童謡 冬景色
- 4 回文 良き月夜
- 5 今月の詩 時計 萩原朔太郎
- 6 たし算 9の段
- 7 ことわざ 身から出たさび 三つ子の魂百まで  
水清ければ魚棲まず 無用の長物 昔とった杵柄
- 8 かけ算 同じかけ算
- 9 俳句 与謝蕪村 松尾芭蕉 正岡子規
- 10 かぞえうた 4膳 8膳 12膳 (箸)
- 11 なぞなぞ
- 12 手あそびうた アルプス一万尺
- 13 今月のうた 反対あいうえお
- 14 慣用句 水を差す 角が立つ 胸に刻む
- 15 イメージトレーニング スティーム (第9話 オメガ星団)  
(イメージしてみましよう)
- 16 おはなし 海の水はなぜ塩からい
- 17 漢詩 獵を観る
- 18 百人一首 寂蓮法師 紀貫之 待賢門院堀川 式子内親王
- 19 復習コーナー
- 20 暗示 (静かなところで目を閉じて聞きましょう)

回 文

よ 良 ぎ 月 つ き よ 夜



よ き つ き よ

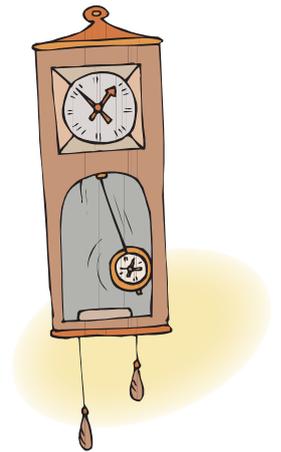


と けい  
時 計

はぎわらさくたろう  
萩原朔太郎

ふる 古いさびしい あき や なか 空家の中で  
い す ぼう ぜん 椅子が茫然として居るではないか。  
う え こ し その上に腰をかけて  
あ み も の 編物をしてゐる娘もなく  
だ ん ろ す わ くろ ね こ すが た み 暖炉に坐る黒猫の姿も見えない  
しろ 白いがらんだうの家の中で  
わ た し も の が な ゆ め 私は物悲しい夢をみながら  
こ ふ う は し ら ど けい 古風な柱時計のほどけて行く  
さ 錆びたぜんまいの響を聴いた。  
じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん ! じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん !

ふる 古いさびしい あき や なか 空家の中で  
む か し こ い び ど し ゃ し ん み 昔の恋人の写真を見てみた。  
お も い だ き お く どこにも思ひ出す記憶がなく  
らんぷ きいろ ひかり かげ 洋灯の黄色い光の影で  
じょうねつ ただよつ い かなしい情熱だけが漂つてみた。  
わ た し い す う え 私は椅子の上にまどろみながら  
と お ひ と け ろ う か む こ 遠い人気のない廊下の向うを  
ゆう れい よ 幽霊のやうにはごれてくる  
は し ら ど けい さ 錆びついた響を聴いた。  
じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん ! じ ぼ ・ あ ん ・ じ や ん !



# ことわざ

## み 身から出た錆

自分のした悪い行いや過ちが原因で、あとで自分が苦しむこと。



## み 三つ子の魂 百まで

幼い頃の性格や気質は一生変わらない。



## み 水清ければ魚棲まず

あまりに清廉潔白すぎると、人に親しまれないこと。



## お 無用の長物

あってもかえってじゃまになるもの。



## お 昔取った杵柄

若い頃にきたえた得意の腕前。



# 俳句

おのい 斧入れて 香におどろくや 冬木立

よきぶそん  
与謝蕪村



はつ 初しぐれ さるこみの 猿も小蓑を ほしげなり

まつおばしょう  
松尾芭蕉



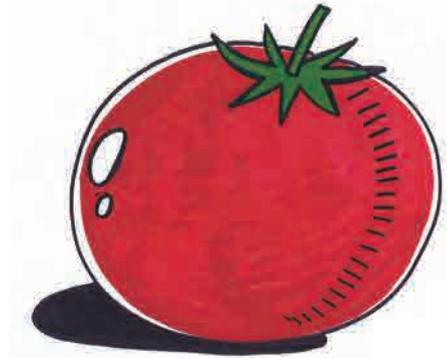
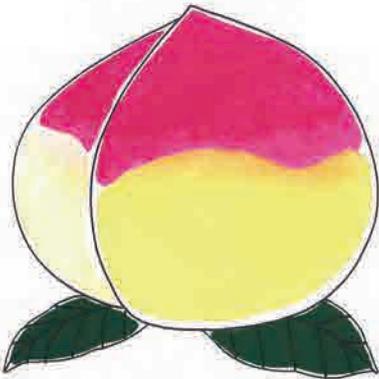
ぶつだん 仏壇の かし 菓子うつくしき どうじ 冬至かな

まさおかしき  
正岡子規



# なぜなぜ

- 1 上から読んでも下から読んでも同じ、夏の果物ななに？
- 2 さか立ちしても、名前のかわらない真っ赤な野菜はなに？
- 3 東西南北の中で、上から読んでも下から読んでも同じ方角はなに？
- 4 木に穴をあけるのがとくいな鳥はなに？



南  
みなみ



## 《アルプス一万尺》 いちまんじゃく

① ア



手を1かい  
たたく。

② ル



みぎ手とみぎ手で  
タッチ。

③ プ



①とおなじ。

④ ス



ひだり手とひだり手で  
タッチ。

⑤ いち



①とおなじ。

⑥ まん



りょう手で  
タッチ。

⑦ じゃ



①とおなじ。

⑧ く



手をくみ、手の  
ひらをあいてにむけてタッチ。

⑨ こや



手を2かい  
たたく。

⑩ り



みぎ手をたてて、  
ひだり手でみぎの  
ひじをさわる。

⑪ の



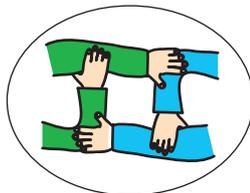
ひだり手をたてて、  
みぎ手でひだりの  
ひじをさわる。

⑫ う



こしに手を  
あてる。

⑬ えで



うえからみると

みぎ手をじぶんのひだりの  
ひじにのせ、ひだり手を  
あいてのみぎのひじにのせる。

⑭ アルペンおどりを  
さあ おどりましょう

①～⑬をくりかえす

⑮ ランランラン ランランラン  
ランランラン ランランラン

①～⑬をくりかえす

⑯ ランランラン ランランラン  
ランランランランラン ハイ

①～⑬をくりかえす

# 今月のうた

## 《<sup>はんたい</sup>反対あいうえお》

んからはじまる

<sup>はんたい</sup>反対 <sup>はんたい</sup>反対 あいうえお

さあ <sup>い</sup>言ってみよう

んをわ

ろれるりら

よゆや

もめむみま

ほへふひは

のねぬにな

とてつちた

そせすしさ

こけくきか

おえういあ

じょうずに <sup>い</sup>言えたかな



<sup>みず</sup> <sup>さ</sup>  
水を差す

うまくいっていることに、わきからじゃまをする。



<sup>かど</sup> <sup>た</sup>  
角が立つ

<sup>ひと</sup> <sup>あいだ</sup> <sup>おだ</sup>  
人との間が、穏やかでなくなる。



<sup>むね</sup> <sup>きざ</sup>  
胸に刻む

しっかりと<sup>こころ</sup>心にとどめる。よく<sup>おぼ</sup>覚えておく。

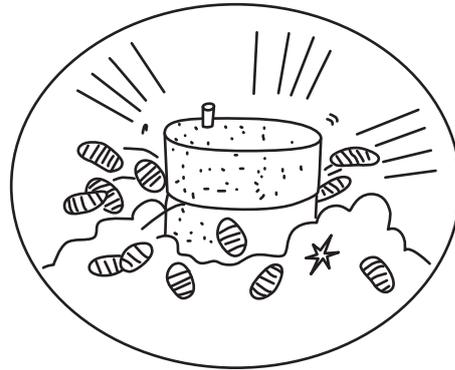


# おはなし



このお話は、どうして海の水が塩からなくなったのかというお話です。お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

- 1 若者は海に出て、何を釣り上げましたか。
- 2 若者は、小さな神様たちの何と交換しましたか。
- 3 右に回すとどうなりましたか。
- 4 泥棒がお宝を盗み、舟の上で何を出しましたか。



獵を觀る

王

維

風勁くして 角弓鳴り  
 將軍 渭城に獵す  
 草枯れて 鷹眼疾く  
 雪尽きて 馬蹄輕し  
 忽ち新豊の市を過ぎ  
 還た細柳の營に歸る  
 雕を射し処を回看すれば  
 千里暮雲 平らかなり



百人一首

村<sup>むら</sup>雨<sup>さめ</sup>の

露<sup>つゆ</sup>も

霧<sup>きり</sup>立<sup>た</sup>ちのぼる  
まきの葉<sup>は</sup>に  
秋<sup>あき</sup>の夕<sup>ゆ</sup>暮<sup>ぐ</sup>れ

(寂<sup>じやく</sup>蓮<sup>れん</sup>法<sup>ほう</sup>師<sup>し</sup>)

人<sup>ひと</sup>はいさ

心<sup>こころ</sup>も

花<sup>はな</sup>ぞ昔<sup>むかし</sup>の  
香<sup>か</sup>にほひける  
ふるさと

(紀<sup>きの</sup>貫<sup>つらゆき</sup>之<sup>き</sup>)

長<sup>なが</sup>から

心<sup>こころ</sup>も

乱<sup>みだ</sup>れ<sup>だ</sup>て今<sup>け</sup>朝<sup>さ</sup>は  
黒<sup>くろ</sup>髪<sup>かみ</sup>の  
物<sup>もの</sup>をこそ思<sup>おも</sup>へ

(待<sup>たい</sup>賢<sup>けん</sup>門<sup>もん</sup>院<sup>いん</sup>堀<sup>ほり</sup>川<sup>かわ</sup>)

玉<sup>たま</sup>の緒<sup>お</sup>よ

絶<sup>た</sup>え

忍<sup>しの</sup>ぶること  
弱<sup>よわ</sup>りもぞする  
ながらへば

(式<sup>しやく</sup>子<sup>し</sup>内<sup>ない</sup>親<sup>しんのう</sup>王<sup>わう</sup>)



紀貫之